

1998年6月

303 大腸癌患者の血中 IL-6 と sIL-6R レベルと腫瘍増殖能との関連

三重大学第二外科

木下恒材、三木誓雄、伊藤秀樹、松本好市、鈴木宏志
 癌患者では血中 IL-6 値が高値を示すことが多く、in vitro で消化器癌においては IL-6 が腫瘍細胞に autocrine 作用することが示唆されている。大腸癌患者 64 名を対象とし、術前末梢血、術中門脈血を採取し IL-6、sIL-6R を測定した。また、IL-6 の組織中濃度を測定し、IL-6、IL-6R の発現を免疫組織学的に検討した。大腸癌患者の末梢血中 IL-6 値は 32.4 ± 8.4 pg/ml で正常コントロールより有意に高値を示し、末梢血中 sIL-6R 値は 2834.0 ± 1379.1 pg/ml で、腫瘍最大径と有意に相関し、門脈血中 IL-6 と相関傾向を示した。腫瘍組織における IL-6 の組織中濃度の平均値は 1237.72 ± 229.7 pg/g tissue で正常粘膜組織の濃度の平均値 483.4 ± 134.2 pg/g tissue より有意に高値を示し、末梢血中 IL-6 と有意に相関した。免疫組織学的に IL-6 は癌細胞の細胞質に、IL-6R は細胞膜に発現していた。大腸癌患者では血中 IL-6 値は腫瘍細胞からの産生量を反映し、IL-6R が IL-6 の作用を増強するメカニズムが大腸癌においても存在することを示唆していると考えられた。

304 直腸癌における神経栄養因子(nerve growth factor)の発現と神経周囲浸潤との関連

金沢大学第二外科

安居利晃、太田哲生、西村元一、田島秀浩、北川裕久、伏田幸夫、藤村 隆、萱原正都、三輪晃一

【目的】直腸癌における nerve growth factor (NGF) の発現と神経周囲浸潤との関連性について検討した。

【対象と方法】①ヒト直腸癌培養細胞株 SW 837, CaR-1, RCM-1 における NGF mRNA の発現を RT-PCR 法により調べた。②ヒト直腸癌組織における NGF 蛋白の発現と神経周囲浸潤との関連：深達度 ss(ai)以上の進行直腸癌 56 例を抗 NGF 抗体による免疫組織化学的染色により腫瘍細胞が 25% 以上染色される高発現群と 25% 未満の低発現群に分類した神経周囲浸潤は perineural space に腫瘍細胞が存在するもののみを陽性とした。【結果】①培養細胞では CaR-1 と RCM-1 において NGF mRNA の発現を認めた② NGF の高発現は 32 例(57.1%) に、神経周囲浸潤は 17 例(30.1%) に認め、神経周囲浸潤は NGF 高発現群の 40.6% (13/32) に認め、NGF 低発現群の 16.7% (4/24) と比較し高い傾向にあった ($p=0.053$)。【結語】直腸癌 NGF の発現が確認されその腫瘍内発現の程度と神経周囲浸潤との関連性が示唆された。

305 大腸癌における Methionine adenosyl-transferase (MAT) の発現と臨床病理学的因子との検討

十浦協同病院外科、東京医歯大難治研病態牛化学¹⁾ 伊東浩次、堀川三郎¹⁾、滝口典聡、神戸文男、登内彰、平沼進、柴田光一、真田勝弘、岡本浩平、登内真

(目的と方法) MAT は、メチオニンと ATP から S-adenosyl-methionine (SAM) の合成反応を触媒する酵素である。SAM は生体内のメチル化反応のほとんど全てのメチル基供与体となる蛋白である。本酵素は、肝臓だけに特異的に存在する肝臓型酵素と肝臓以外の臓器に広く存在し、腎臓において最も活性の高い腎臓型の 2 種類のアイソザイムが存在する。今回、正常大腸粘膜においては MAT のいずれのアイソザイムが存在するのか、また癌化したときにこの酵素の発現がどのように変化するかを Western blot 法を用いて調べた。更に免疫染色で MAT の局在を調べ、進行大腸癌 10 例で酵素活性値を臨床病理学的に検討した。(結果) 正常大腸粘膜においては腎臓型 MAT が僅かに発現し、進行大腸癌では、腎臓型の発現が正常粘膜に比較して著明に増加していた。免疫染色で見ると腺管内腔側の細胞質に強く発現が認められた。腎臓型酵素活性値を TN (tumor/normal) 比で見ると平均値は 3.76 で、癌が進行するに従って酵素活性値も上昇する傾向を認めた。組織型や腫瘍占拠部位、CEA とは関連を認めなかった。

306 進行大腸癌の予後因子としての糖鎖抗原 Sialosyl-Tn antigen (STn) の有用性

横浜市立大学第一外科

羽鳥慎祐 今田敏夫 長 晴彦 大島 貴
 塩沢 学 高橋 誠 田辺浩梯 蓮尾公篤
 利野 靖 天野富薫 近藤治郎

【目的】進行大腸癌患者の予後決定因子を明らかにする。【対象】1990~1992年に横浜市立大学第一外科および関連施設において根治手術が行われた漿膜浸潤陽性大腸癌 78 症例を対象とした。【方法】DNA ploidy pattern, Ki-67 標識率および STn, CA19-9, CEA の血中、組織内発現の有無と臨床病理所見 (年齢、性別、占拠部位、腫瘍径、深達度、リンパ節転移) および予後との関連性を求めた。【結果】(1) DNA ploidy pattern および Ki-67 標識率と臨床病理所見との間には有意な関連性は認めなかった。(2) STn, CA19-9, CEA の血中、組織内発現率と臨床病理所見との間に有意な関連性は認めなかった。(3) STn の発現陽性例の 5 年生存率は陰性例より不良であった。しかし、CA19-9, CEA の発現と 5 年生存率の間に有意な関連は認めなかった。【まとめ】STn の血中および組織内発現の有無が、進行大腸癌患者の予後を決定する因子となりうると思われた。